

S S R I

ちよつと一言

Give me a break !

ルカシェンコよ、どうする？

藤岡智和

数年前まで欧米各国のマスコミは、ベラルーシのルカシェンコ大統領を「欧州最後の独裁者」と評していたが、ここ数年の動きを見ると「独裁者」と言うより「狡猾者」という形容がふさわしいと思う。

ソ連崩壊後「白ロシア共和国」独立したベラルーシでは、1994年の大統領選挙で「ロシア連邦との統合」を公約に掲げたルカシェンコが大統領に就任したが、彼はロシアと統合した国家での最高指導者を狙っていた。

このためロシアとの関係はあまり円滑ではなく、2015年にはロシアがベラルーシに空軍基地をつくる要求に、色よい返事をしていなかった。

その後ロシアからの通貨統合の申し入れも断ったため、ロシアはそれまでベラルーシに西欧諸国とは別の低価格で提供してきた石油供給価格の引き上げを断行した。この際には2020年に米国務長官が26年ぶりにベラルーシを訪問し、ロシアに代わってガスと石油の提供を申し入れ、両国は急接近した。ベラルーシはこの年、同国の情勢不安定化を画策したとして、ロシア人の傭兵32人を拘束している。

ところがこの年に行われた大統領選挙へ国内で抗議活動が高まるとルカシェンコ大統領は一転してロシアに擦り寄り、反西欧、反米に舵を切った。

ところが、2022年2月24日に開始されたロシアのウクライナ侵攻では、その前にロシアとの大規模合同演習を行い、基地を提供するなど、ロシア軍の侵攻を支える姿勢を見せるものの、侵攻作戦に加わろうとしていない。

ルカシェンコはロシアに対しどのような立ち位置にいれば良いのか、必死になって情勢を分析していると思われる。ベラルーシにとってではなくルカシェンコ自身にとってである。

戦況は日を追ってロシアにとって不利に傾き、たとえベラルーシが参戦しても勝ち目はなく、参戦すれば共倒れになるのは目に見えている。参戦をしなくてもロシアが負ければルカシェンコも政権維持ができなくなる。

ここでベラルーシが、と言うよりルカシェンコが取り得る最善策は「第2次大戦に於けるスペインのフランコ総統になる」ことであろうし、またそれしかないのではないか。

ヒトラーの盟友で、スペイン内乱ではドイツ軍に助けられたフランコは、第2次大戦でドイツとイタリアに組みせず中立の立場を取ったため、戦後も永くフランコ政権を維持できた。

今後、ルカシェンコは徐々にロシアと間合いをとり、最終的に「敗戦国」になるのを避けて「中立国」であったと言い張ろうとするのではないか。

ただ今までの彼の言動を知る世界がそれを許すかである。

(2022年10月24日)